

暮らしの中のアート

— 「かたち・ふれあい」展の10年

Art in daily life

10 years history of the Exhibition: 'Shape & Communication'

藪田 碩哉

生活福祉学科教授

抄録

短大50周年の記念イベントとして始まった「かたち・ふれあい」展は、2010年で10回目を迎えた。キャンパスの日常に突如として出現する多種多様な「かたち」群は、短大の日常生活に美的な刺激を与えてくれるばかりでなく、いくつもの授業の中で活用されて学生の学びを豊かにしてきた。また、関連するいくつかの小イベントは、大学と地域社会とのコミュニケーションを促進する役割を果たしてきた。

キーワード：彫刻、造形、イベント、コミュニケーション

はじめに

「かたち・ふれあい」展は実践女子短大の秋の風物詩として欠かせない存在になっている。秋のある日、突然に、いつもは殺風景なキャンパスに、さまざまな「かたち」が出現する。それも、日常生活の中で当たり前に見ている「かたち」ではない。一種不可思議な、見たこともない、奇妙な、愛らしい、わけが分からない……もろもろの「かたち」たちの登場に、学生も教員も、思わず足を止めて見入ってしまう。誰彼となく「かたち」をめぐる語り合いが始まる。「かたち」は新たな「ふれあい」の出発点となる。

そして一ヶ月余、短大のキャンパスは「かたち」の競演する美の空間に変貌し、短大にやってくる人々の癒しと潤いの場となる。木枯らしの吹き初めるころ、もろもろの「かたち」がすっかり日常に溶け込んで、誰もが「かたち」の存在を当たり前の事実として疑いもなく受け入れるようになったところで、ある日それらは突然に姿を消し、誰もがその喪失感を小さな衝撃として味わってこのイベントは終わりを告げる。秋の小さなドラマは毎年繰り返されて、2010年には10回目の節目の年を迎えた。

1. 誕生のいきさつとその後の経緯

●草創のいきさつ

「かたち・ふれあい」展の始まりは、2000年の短期大学50周年記念イベントとしてであった。筆者は当時、短大のオープンカレッジ実行委員長として日野市の生涯学習関連の組織と繋がりがあったが、その会合で地元の彫刻作家・岡本参千峯氏と知り合った。岡本氏のグループは市役所の隣の文化会館で「彫刻造形展ひの」を開催してきたが、作品を展示するのにもっと広い空間がほしい、ついては短大のキャンパスを借りられないか、という話になった。その要望と50周年の記念事業を模索していた短大の意向が一致して、このイベントが開催されることになったのである。その実現については当時の短大部長・加藤裕一教授、事務次長だった窪田（現・渡辺）夏子女史の理解と尽力が大きな役割を果たした。窪田次長は年度途中にも関わらず学園にかけあって新規の予算獲得に奔走され、実践桜会の協力も取り付けられた。「かたち・ふれあい」展という命名も窪田次長の発案によるものである。また、当時の飯島俊郎学長も強く応援してくださった。それらの努力が相まって2000年10月、短大キャンパスのそこここにさまざまな「かたち」が登場し、学生、教員の目を眩らせるユニークな野外彫刻展がスタートしたのである。

「かたち・ふれあい」展は学内外の話題となった。美術系の大学でもないのに、正門を入ると大きな石像が目飛び込んでくる。中庭や食堂のロビーや図書館の階段下など至る所に石や木やガラスや金属を素材にした、具象抽象の彫刻造形作品が並ぶ。グラウンドの一隅に出現した石造りの巨大な像は、ことのほか存在感を誇っていた。当時は短大を会場に「オープンカレッジ」が開かれていたので、その受講生の市民たちもおのずからこれらの彫刻作品を鑑賞することになった。オープンカレッジの科目にも造形教室が入り、その中で公開講座として「生活の中の美の問題」と題した作家トークも行われた。こうして50周年記念事業としての第1回「かたち・ふれあい」展は成功裡に終わったのであった。

当初このイベントは一過性の記念行事としてその後の継続の予定はなかったのだが、内外の評判がよかったことや作家側の要望もあり、2年目は大学に会場を移して行われた。こんどは大坂上のキャンパスが「彫刻の森」に生まれ変わって、学園祭を含む秋の一時期の美の空間が演出されたのであった。3年目は諸般の事情で休催されたが、この行事は短大の行事として位置づけることが決まり、2003年10～11月に第3回展が短大キャンパスで開かれた。協力

〈別表〉 「かたち・ふれあい」展の10年
10回までの歩み

回	開催日程	場所	参加作家数
第1回	2000年10月10日～11月17日	短大キャンパス	24人
第2回	2001年10月15日～11月22日	大学キャンパス	25人
第3回	2003年10月14日～11月21日	短大キャンパス	25人
第4回	2004年10月12日～11月26日	同上	30人
第5回	2005年10月11日～11月25日	同上	36人
第6回	2006年10月10日～11月24日	同上	38人
第7回	2007年10月9日～11月23日	同上	45人
第8回	2008年10月14日～11月21日	同上	46人
第9回	2009年10月12日～11月20日	同上	42人
第10回	2010年10月11日～11月19日	同上	52人

団体として作家による実行委員会が組織され、岡本氏に代わって田宮義寛氏が実行委代表となった。事務局は学生課の加藤千史女史が担当となる（2007年からは竹田真由子さん）。以来、今日まで実践短大の名物行事として回を重ねてきた（前ページ表参照）。

●短大行事として定着

第3回の「かたち・ふれあい」展（2003年）を実施するに当たって、筆者はそれが単に物珍しい見せ物に終わるのではなく、短大の学習自体や学生生活にとって意味あるものとなるように、そのための策を練った。生活福祉学科は「生活を豊かに、美しく、楽しくする」福祉文化の追求を課題の1つとしているので、日常生活に近いところでアートにふれ合うことそのものが学科の学習課題となる。関連する授業の中で造形をはじめ、さまざまな芸術活動の意味を考えるために「かたち・ふれあい」展は格好の教材と言える。また、学科のテーマの1つとなっていた体験学習という視点からも、実際に作品にふれ、それをスケッチしたり、写真に撮ったり、感想を書いたり、彫刻作家にインタビューしたり、多様な活動を展開することができる。筆者は自分の授業のさまざまな局面で、「かたち・ふれあい」展の活用を考えた。ゼミでは作品のスケッチや感想を書きあい、作家の方々に送って返事をもらい、「福祉文化論」では「癒しの芸術」という視点、「遊戯文化論」では「遊びと芸術」という論点で作品の鑑賞や創作論を取り上げた。

学科の先生方の中で、特に「かたち・ふれあい」展と授業とを深く結びつけられたのは、身体表現演習の越部清美講師であった。越部講師は、授業のテーマの1つである「ソロの身体表現活動」に2005年度から「かたち・ふれあい」展を取り上げ、1つの作品を選んで、その前で作品と関わるパフォーマンスを行うという課題に挑戦された。これは大きな成功を収め、次年度からは作家のみなさんをお呼びしてその前で学生のパフォーマンスを披露し、意見交換を行うというプログラムに深化させ、毎年継続して深い学びを得られている（この件はさらに後述）。他にも共通教育の「芸術B（美術）」（鈴木講師）、日本語コミュニケーション学科の「自己表現法」（加藤教授）などの例がある。

●「かたち・ふれあい」展を巡るイベント

また、「かたち・ふれあい」展を活用した第2次イベントも企画・実施された。2003年度に取り組みされた「かたち・ふれあい」展協賛「私の好きな作品コンクール」もその1つである。これは「かたち・ふれあい」展を学内外の鑑賞者にもっと楽しんでもらうために、また、学生や市民が造形芸術への理解をよりいっそう深めるために、鑑賞者に好きな作品を選んで投票してもらい、票数の多かった作品を顕彰するというイベントで、呼びかけのポスターやチラシを作り、入場受付で投票用紙を渡し、帰りに投票箱に入れてもらう方式で、同年11月5日（水）～8日（土）の常磐祭期間の4日間にわたって行われた（学生に対しては各学科で投票用紙を配布し、期間内に投票してもらうことにした）。学園祭1日目には、学生ボランティアによる「かたち・ふれあい」展ガイドを配置し、来場者を案内し、簡単な解説と投票のお願いをする。このとき希望者には画用紙とエンピツを渡し、スケッチを楽しんでもらう。スケッチ作品を提出してくれた人には、作

家から返事（コメント付き絵はがき）をお送りする、という仕掛けであった。

学園祭の間という短い期間ではあったが、学生も一般の来場者も興味を持ってくれ、投票用紙を片手に作品に見入る姿が見られた。投票総数は90票、開票の結果、「かたち・ふれあい大賞」に選ばれたのは田宮義寛氏の「時風」ほか、「かたち・ふれあい賞」は2点で、石川麻「臨丘風鈴」ほか、および信時茂氏の「大地の唄」ほか、となって、9日に短大メモリアル・カフェで表彰式が行われ、飯塚学長から賞状と記念品が手渡された。その後、受賞された作家のみなさんとイベントに携わった学生との懇談会が和やかに行われた。学生から「もっと投票期間を長くした方がいいのでは」という意見もあり、その後は投票期間を拡大して、現在まで毎年続けられている。

彫刻造形作家のみなさんは全くのボランティアで作品を提供されている。その労に少しでも報いるために学園が主催する作家の懇親会が開かれてきた。当初は会期の終わり頃に開かれたこともあるが、2006年からはスタートしてすぐの時点で「オープニング・パーティ」として行われるようになった。短大のメモリアル・カフェを会場に、出品された作家のみなさんを囲んで、学長、理事長、教職員と学生、日野市長をはじめ地域の学校関係者などのゲストを迎えてにぎやかな交流の時間を持つ。その企画と進行は、生活福祉学科の学生有志が事務局学生担当と相談しながら進めてきた。学生にとっては大がかりなパーティの進行は貴重な体験学習の機会であり、挑戦に値する課題である。全作品をあらかじめ撮影しておいてスライドで紹介するなど、その年ごとに工夫を加えながら、これも毎年継続されてきた。

もう1つ、関連イベントとしてユニークなのは「スタンプラリー」である。これは作家のみなさんひとりひとりに好きなスタンプの制作をお願いし、参加者にはスタンプシートを配って作品巡りをしてもらい、鑑賞できた作品の作家のスタンプをシートに押しつけて記念とする趣向である。はじめは各作品の横にスタンプを置いて押しつけてもらうというアイデアだったが、野外にスタンプを置いておくのも不向きなので、スタンプ自体は事務所に置いて鑑賞のあとで押しつけてもらう方式になっている。何しろ個性的なことでは人後に落ちない作家諸氏が多種多様の素材を使って腕によりをかけて作ったオリジナル・スタンプなので、それぞれが見事な作品になっている（写真参照）。数十個のスタンプを展示すれば、それ自体がミニ「かたち・ふれあい」展になることだろう。

関連行事として重要なのは小学生の見学である。造形の楽しさ、面白さを子どもたちにも知ってもらおうと呼びかけを行ったところ、大学と短大の真ん中にある日野市立第7小学校が全校を上げて参加してくれることになった。2006年から始まった方式は、1学年ごとに日を決めてそろって短大にやってきて、作品鑑賞やスタンプラリーを楽しむというやり方で、総合・生活・図工の時間が当てられている。秋のある日、短大キャンパスに時ならぬ小学生の元気な声が響き渡るというのもすっかり定着した。今年(2010年)は実行委員会が10回目の記念イベントとして《み



ユニークなかたちのオリジナル・スタンプ

んなでつくろう》という「参加造形」を企画してくれた。グラウンドに組んだテントの骨組みにネットを張り、来訪者が使い古した布を自由に結びつけていくという仕掛けであるが（写真左）、小学生たちも嬉々としてこのプログラムに参加していた。筆者の「子どもの生活」という授業では、この機会を捉えて子どもたちと共に「参加造形」に参加し、子どもたちの学習や遊びについてインタビューを行うという課題をやってみた。学生たちも子どもに帰ってコミュニケーションを楽しんでいたようである。（なお、作品鑑賞には日野本町にある第1小学校からも生徒たちが来てくれている）。

もう1つ、1回限りで終わっているが、芸術のジャンルを越えた交流をめざしたイベントも試みられた。2005年11月12日の「造型と音楽の夕べ：平家琵琶を聴く」がそれである。中央公民館の協力のもとに行われたもので、ギンガムを会場に5点の造形作品を配し、そのただ中で琵琶奏者の田原順子の演奏を聴くという趣向であった。インスタレーション作家の松木恵次氏がこの日のこの会場のためだけに特別に作品づくりをしてくれた（写真右）。荘重な琵琶の響きと語りと造型作品が響き合う、一種不可思議な世界が展開され、参加者に深い感銘を与えた。今後もこうした新たな挑戦が行われることを期待したい。



参加造形の様子（2010）



造型と音楽のための空間（2005）

2. 出品者それぞれの思い

この10年間に出品してくれた作家は全てで104人である（そのうち毎回欠かさず参加された「皆勤賞」の作家は伊藤タダオ、大塩英生、酒井道久、田宮義寛、堀本俊樹の5氏である）。作家の中から実行委員に名を連ねて世話役を果たされてきた6人の作家と企画の発案者である岡本三千峯氏を招いて座談会を行った。そこで出されたさまざまな声の一端を要約して紹介する。

堀本 俊樹：10回重ねてきて今思うのは、付き合いの輪が広がったこと。作家同士でも色々な面を見ることが出来た。私はもともと組織に入るようなことには二の足を踏むようなところがあったのだが、こうやって何年も付き合っているうちに、機会があれば、

かなり積極的に動くようになってきた。いま、別の場所でも地域の人と一緒にって展覧会やっている。自分自身が変わった。他にも新しい展覧会を始めたという方は多いのではないか。

渡辺 一宏：初回からずっと参加している方もいれば、途中でやめた方もいる。新たに参加する作家の人もいて、「かたち・ふれあい」展の趣旨も皆さんの想いも変化していくものだと思う。それをネガティブに捉える必要はない。ああすればよかった、こうすればよかったという後悔が少なくなって、1歩でも半歩でも良い物になっていけばと思う。

「かたち・ふれあい」展は、大学のキャンパスでやったということに意味があると思う。そのように場所が限定されることによって引き起こされるものは何なのか、そこを考えてみたい。来場者は多くなかったかも知れないが、評価の基準は、学生たちや大学の教員の方々も含めて、大学というものがどういう風にそれをとらえようとしてきたかということにある。これをもう少し明確にリサーチしないとどう評価したらいいのかが分からない。

私は「あるものが無くなる」ということに意味があると思っている。今まであったものが無くなることによって、はじめて「ある」ということが実感できるわけで、そこに確実なものがある。毎年、ある期間、彫刻があってまた無くなるということを学生たちも先生たちも経験できたということが、作家側としては非常に意味が濃いのと思っている。

伊藤タダオ：1回目から出品してきて感じるのは大型のタイプの人が少ない。大型の彫刻はどうしても運搬が大変、お金もかかる。ある程度の大きさにしぼんでいったのはやむを得ないだろう。それと今の時代と僕らの作品にはギャップがあると思う。時代は移っていくものだから、若手を入れていくのも面白い。いわゆる彫刻・造形だけでなく、現場を使ったインスタレーションを作る作家もいてもいいのでは。

個人的には、大学内は安全地帯だと感じてきた。河川敷とかで展示すると、日の入りから日の出までの間でも作品が誰かに持っていかれたり、割られたりする。夜になったらもっと心配(笑)。しかし、大学内ではそういう事がない。安心して展示できる。どんな作品を作ってもいたずらをされない。これはありがたい。

高橋 敬子：せっかく大学でやっているのだから、大学生も単に傍観者ではなく、何らかのかかわりを持ってもらうことが好ましいと思っている。彫刻は絵画と違ってみんな遠巻きに見ていて作品への積極性が足りないと思う。この展覧会が美術には関係ないと思っている学生の入口になって行ってほしい。実践短大がこうした機会を学生のために取り込まれたのは、都内のS病院が院内に絵を飾ったり、最近では彫刻展示も試みているのに通じるものがあると思われる。美術が人の心を癒し豊かな気持ちを育

み、生きる喜びへと連なるなら、ここでの学生が将来子どもを産み育てることに多少なりとも活かされれば嬉しい。ここの展覧会は、美術に興味を持たないような人にも、大学生から小学生まで、見てもらえたことがプラスになった。生活の中にそういう楽しみを取り入れてみたいと思う人がだんだん増えてきたという意味ではないか。

岡本参千峯：「かたち・ふれあい」展は「おいしい」展覧会。作家の負担も少ないし、期間も長い。こういう展覧会を我々はどう受け止めていったらいいのか。僕はアーティストというのは、パイオニア精神をもっていないと迫力が無いと思う。本来作家はみな、そういう精神をもっているのだが、いつのまにか弱められる。みんなと同じバスに乗れば楽だ、ではなくて、一人でも良いからやろうという気が展覧会の良さに繋がっていくのではないか。そういうパワーが展覧会のパワーになると考えている。

田宮 義寛：第一回目のときは、従来の素材としての石と木と金属が多くを占めていたが、それがだんだん搬入・搬出の費用がかかるということからこぢんまりと小品化しはじめた。野外彫刻というスタートだったのに、だんだん室内へ入って行った感じがある。5回目くらいからは、素材の多様化というか、従来の固定した素材ではなく色々な素材を使って表現される作家が多くなった。かつての素材に対してぶつかって行くというよりは、いろんな素材の細かい作品が多くなってきた。また、はじめは具象彫刻と抽象が半々だった。5回展くらいまでは半分半分、それ以降は抽象が多くなってきたように思う。インスタレーション作家も増えてきて、キャンパスの空間を生かして何かを作るといような形になってきたと感じている。

石川 麻：野外彫刻という点から見ると芝生がとても美しい、場所が素晴らしいと思う。それと自分もそうですが、やっぱり作品が小さくなっていると思う。

3. 学生の反応と短大教育における意義

「かたち・ふれあい」展がもたらしたものを学生の立場から見直してみると、はじめは単純に「珍しい」「面白い」という反応が主であった。それが毎年続けられることによって、2年生の秋に再び目にする時には、物珍しさを越えて彫刻造形作品と関わってさまざまな感じたり考えたりする機会になってきたと思われる。絵画の場合は自分で描くことが簡単に出来るし、絵画作品に接する機会も、わざわざ美術館に足を運ばなくても街のギャラリーでも日常的に得ることが出来る。しかし、彫刻造形作品に触れる機会はそれほど多くはない。一般的に彫刻は特別な場所にあるものという意識が強く、距離感がある。その中で1ヶ月以上にわたってキャンパス全体が造形の「美術館」になるというのは希有な場面であろう。彫刻造形作品を毎日見続けて生活の中にある当たり前の風景にする——このことが造形作品と人間生活との距離を縮める役割を果たした

2010「かたち・ふれあい」展の作品

撮影：雨宮菜々子



伊藤タダオ
三の誓



田宮義寛
空の下で①



岡本三千峯
廃墟



石川麻
やまびこ



田宮義寛
空の下で②



渡辺一宏
形象の世界



堀本俊樹
場所・北西の椅子



高橋敬子
託された時

はずである。たとえ明確に意識されなくても、この経験が心の中に沈殿して、学生が社会人になった時に彫刻というものを見る目が多少なりとも積極的なものになり、その分、人生が豊かになることが期待できるのではなかろうか。

筆者は自らの授業を通じて、造形作品との「ふれあい」を追求してきた。スケッチを描かせてみたり、作品から感じられたことを言葉にしたり、作品の前でポーズを取った写真を撮り合うというようなことも試みた。前述のように「かたち・ふれあい」展を巡るイベントを企画・実施して、作品だけでなく作家との関わりや地域社会との連携も体験してきた。それらを整理して卒業研究としてまとめた例もある。生活を福祉（幸福）に近づける「生活福祉」の大切な実践として「彫刻造形のある生活」への意識づけを試みてきたのである。

授業に「かたち・ふれあい」展を活用して、作品との関わりにもっとも積極的に取り組んでいられるのは、前述した生活福祉学科「身体表現演習」の越部清美講師である。授業の目標の1つである「ソロの身体表現活動」に「かたち・ふれあい」展を生かし、学生がそれぞれ1つの作品を選んで、その前で思い思いのパフォーマンスを行うというものである。作品に向かい合うことによって自らの内に盛り上がってくる感情を動きにして表現する。この課題に挑戦した学生はその過程を次のように書いている。

「直感で石のオブジェに惹かれた。その作品を見たとき、パッとイメージがわいた。石の作品のなかには、道ができていくというか、迷路のような感じだったので、草原の迷っている小動物がどんどん突き進んでやがて草原から抜け出すことができうれしいな一みたいな感じで表現しようと思った。」『生活福祉』第6号（2006）5ページ

学生たちの実践を踏まえて、越部講師は次のように述べている。

「学生たちは、それぞれに1つの作品に出会い、ある者は強い衝撃を受け、ある者は共感し、ある者は人間性を感じ取っていた。そして、キャンパス内に出現した「かたち」たちと共に、魅力的な空間を創りあげていった。そこには美や真実を追求し続けるアーティストの方々への尊敬のまなざしが込められているようであった。」（同上6ページ）

2007年から越部講師はこのパフォーマンスを公開し、造形作家に見学を呼びかけている。招きに応じて多くの作家が公開パフォーマンスに立ち会うことになり、学生たちは大勢のギャラリーを前にして果敢な挑戦を試み、いまでは学科の名物行事の1つになっている。参加した作家は次のような感想を寄せている。

「コミュニケーション力を高めるのによい授業と思う。学生の素直な動きに作品の静止との関係性で新たな視点が生まれる。作り手（造形の）と観者であり演者である立場が面白い」

「作品だけを見るのとはまた違った意味が増殖されたような、発展されたような、上向きのパワーが感じられた。若い人の感覚が、素直でイキイキしていることがうれしかった。」『生活福祉』第8号（2008）56ページ

身体表現を触発する媒体として造形作品を生かすという方法は、この授業の根幹に定着し、「かたち」の表現と「からだ」の表現が交感するユニークな授業が実現したのである。

4. 「かたち・ふれあい」展の意味するもの

●空間の変容

「かたち・ふれあい」展をやっていると、多くの人はこの短大に美術関係の学科があると思うようだ。もちろんそうではない。ではなぜ、短大とは縁のなさそうな彫刻造形展を続けているのか。一見ちぐはぐなこのイベントをどのように説明できるのか。

大学という場所は知的追求または知的生産の場であることは間違いない。そして大学と芸術というのは、学科の如何を超えてなんらかの本質的なつながりがあるのではないか。換言すれば「知」と「美」との間に存在する、切っても切れない関係である。知的なものとの美的なものは相互に刺激し合い、包摂し合うことができる。これまでそのことをしっかり突き詰めて考えたり議論して来たわけではないが、10年続ける中で教職員にも学生にもそうした気分が次第に共有されてきた。大学という場こそ美の空間としてふさわしい、という漠然とした感覚についてもう少し敷衍してみよう。

私たち人間は毎日の「時間」を生きるとともに、また「空間」をも生きている。多くの方は職場という空間と住居（家庭）という空間を往復するが、時には盛り場のような「第3の空間」で羽根を伸ばすこともある。それぞれの空間には固有の装置があって、そこにふさわしい雰囲気醸し出している。教員と学生たちが共有する学校という場所は、それ自体としてはあまり魅力的とは言えない空間である。校門があって中庭があってグラウンドがあり、校舎に入ればただ広い教室、教壇と黒板、それ以外には装飾的なものはほとんどない。毎度おなじみの教室風景が毎日繰り返され、教授たちは相も変わらぬ講義をし、学生たちは退屈そうにノートを取ったり、居眠りをしたり、隣の仲間と囁き交わしたりして学校の時間が過ぎていく（ように見える）。

秋の「かたち・ふれあい」展はこの日常を一変させる。見慣れた校門の脇に、建物の入り口に、廊下やロビーに突如として出現する「かたち」が空間の変容を迫る。何の変哲もなかった当たり前の場所の雰囲気が異物の進出によって揺さぶられる。思わず足を止めて何がどう変わったのかを考えてしまう。さまざまな「かたち」の出現が空間にもたらす磁場の変化を、短大の学生も教員も毎年の新たな経験として感じ取ってきた。空間が変容することで、そこで展開される時間もまた変容せざるを得ない。何か新しい出来事が起きそうな予感にとらわれる。作品群が発する美のメッセージを受けて短大の時間の中に美しいもの、さらには知的なものへの憧れが産み出される。平凡な日常を超える何やら非凡なもの、新たな創造への志向が生じ、それが短大の日常を活性化する。

もろもろの作品群が次第に日常に溶け込み、はじめの物珍しさが次第に消えて「かたち」が日常そのものになろうとする頃、突然にそれらが消える。すべては失われてかつての変哲もない短大の風景が還ってくる。ここで学生も教員ももう一度衝撃を受ける。「かたち」たちが不在になったことで今度はイメージとしての作品群がひとりひとりの心の中に想起される。不在の「かたち」たちが改めてその存在感を主張し、われわれはそれらがまたいつの日か帰ってくることを期待し、どこか別の場所で造形作品を目にしたときにも、実践短大の「かたち」との対比でそれらを眺め、

批評するようになる。存在と不在の繰り返しの中で「かたち・ふれあい」展は秋の40日だけでない、年間を通じてのイベントとして定着してきたのである。

●かたちとコミュニケーション

作家の代表である田宮義寛氏は、「かたち・ふれあい」展の名称について、「かたち」と「ふれあい」を単に継ぎ足したのではなく、「かたち・ふれあい」という1つのまとまりにこそ大きな意味がある、と指摘している。「かたち」を提供するのは作家の責任、それに対してそれにふれあって何かを感じるのを見る側の責任、その両方が融合するのが「かたち・ふれあい」の意味ということになる。作家の作品としての「かたち」が見る側に向かってふれあってくる。見る側も「かたち」を手がかりに作者を感じ取る。「かたち」を媒体にして人間同士のふれあいが促進されるというのである。

「かたち・ふれあい」展の多種多様な「かたち」こそは、人をつなぐ独自の媒体である。一人で作品に向かえば、作者との時空を超えた暗黙のコミュニケーションを楽しめるし、何人かで「かたち」の前に立つなら、言葉を掛け合わなくても、心の壁の深いところからの共感や連帯（疑問や混乱もあっていい）を確かめ合うことができるだろう。もちろん、作品について語り合えば言葉のコミュニケーションも深まること請け合いだ。このコミュニケーション不足の現代に「かたち・ふれあい」展はユニークなコミュニケーション・トレーニングの場を与えてくれる。

「かたちたち」を主役に、この10年間、さまざまな活動が行われてきた。「かたち」は学生や教員の日常の語らいを活気づけてくれた。「かたち」を取り込んで数多の写真が撮られ、スケッチが描かれた。「かたち」とコラボした音楽会も開かれた。「身体表現演習」の授業中で行われる「かたち」をパートナーに見立てたダンス・パフォーマンスは毎年話題となり、それを見学に来る人も増えた。10回目の今年はまた新しい試みとして「参加創造」のコーナーが作られて、子どもたちや学生たちや地域の人々が少しずつ布きれを結んで、パッチワークのような家が出来つつある。こうしてこの不思議な展示会は、短大とその周辺のコミュニケーションの輪を少しずつ、着実に拡大して来たのである。

●かたちのコミュニティ

「かたち・ふれあい」展のさまざまな「かたち」群を見てきていつも思うことは、その多様性ということである。置かれている場所もバラバラだし、造形作品も「何でもあり」の世界である。素材からして土、石、金属、ガラス、布、紙、プラスチックと多種多様で、そこから「かたち」を産み出す方法も、かたちづくりの方向もまことにいろいろで、50作品もあるその一つ一つが絶対的にお互いに似ていない。仲間と同じことをしたら大恥だと作家のみなさん方は考えているのだろうか、共通項に括れない変化に満ちた世界が広がる。

多種多様であることは事実だが、それぞれに居場所を選んで立ち尽くす作品たちは、互いに排除しあっているわけではない。作品を経巡って歩いてみると、あちらの石造りやこちらの木彫りやガラス細工たちは自己主張をしながらも、それぞれを認め合って楽しく共存していることが分

かってくる。「私は私でここにいるが、あなたもあなたでここにいるんですね」という感じ。総じて言えば多彩な作品群は、互いの違いを面白がりながら、一種の連帯感のようなもので結ばれて大きなアートのコミュニティをつくっているのである。

考えてみればわれわれ人間たちのコミュニティも、実に多彩な一人ひとりによって構成されている。感じ方も考え方も生き方も千差万別な人々が織りなす世界で、共通点を見つけるとすればただ一点「人間である」ということに落ち着く他はない。それぞれの生きる「かたち」は違ってても「ふれあい」を通じてお互いを認め合い、違いを面白がり、生かし合いながら共生しているのがコミュニティという場所である。「かたち・ふれあい」展が表現しているのはこうしたコミュニティのあり方そのものなのかも知れない。アートの持つ「コミュニティをつくる力」を毎年秋空の下で発揮しつつ、10年の時を経た「かたち・ふれあい」展は日野というコミュニティにすっかり溶け込んだ存在になっているのである。

おわりに

今後「かたち・ふれあい」展はどうなっていくのだろうか。これまでこのイベントにもっとも積極的に関わってきた生活福祉学科が廃止されることが決まり、「かたち・ふれあい」展の存続を危ぶむ声もある。しかし、このイベントは意欲的な造形作家たちと短大と地域の人々が共に支えてきたユニークな行事であり、その存在意義は誰もが認めるものになっている。運営上、解決すべき問題はあるが、新たな仕組みを整えて存続させることは十分に可能だと思われる。実践学園が日野という地に根を下ろして、その重要な一員である限り、「かたち・ふれあい」展はそのことを象徴する大切な行事として今後も維持されて行くべきであろう。

〈参考文献〉

- 実践女子短大キャンパス展「かたち・ふれあい」展・図録 第1回～第10回
- 『生活福祉』実践女子短大生活福祉学科 第6号 第8号
- 『地域団体と連携した体験学習の推進』実践女子短大生活福祉学科 2004年
- 『学びの場としての「まち」』実践女子短大生活福祉学科 2006年
- 『地域を生き、地域に学ぶ』実践女子短大生活福祉学科 2007年